



宮城県

久野 俊洋さん(高瀬)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：6月10日

宮城県仙南地域で交流会をひらきたい！ —2年経ち、益々感じる 浪江の皆さんのありがたさ—

久野さんは、現在宮城県角田市の借上げ住宅に、お父さんと奥さんと共に
お住まいです。息子さんはいわき市の高校に通うため下宿中。今の暮らし、
浪江の皆さんへの思いを語ってくれました。



▲右から 俊洋さん、園雄さん、時子さん

■宮城県角田市に移住
現在は、私と妻の実家がある角田市に住んでいます。見ず知らずの町ではないので安心です。また、知人らが私たちを勇気づける交流会なども開いてくれました。ありがたいことです。
今の私の仕事は角田市役所の臨時職員です。商工観光課で市のゆるキャラと一緒にPR業務に励んでいるんですよ。妻の

■いつかは焼肉店を再開したい
今後の暮らしとしては、角田に住み続けることになっていきます。そして、本当は浪江で営業していたように焼肉店を再開したい気持ちでいっぱいなんです。でも、難しいのが現状です。店などの賠償に関する事、事業を再開する場合の支援などの情報があればうれしいのですが、どう情報収集すればいいのかわかりません…。
こんな悩みもありますが、これからは今までお世話になった方との人づきあいを大切に継続したいと思っています。宮城県内にも多くの浪江町民がいると聞きます。仙南地域にお住まいの方を中心に集まり交流し、お互いを励まし合えたらいいですね。

■充実していた浪江での日々
今回は、私から役場に連絡をして「こころ通信」への掲載をお願いしました。と言いますのも、震災から2年3カ月が過ぎ、浪江でお世話になった皆さんのありがたさをひしひしと感じ、お礼の言葉を伝えたいと感じたからです。
当時は、浪江では焼肉食堂を営んでいました。母の代から、ちょうど26年間です。外から浪

江に移り住み、商売を始めた私たちに対して、親身に面倒をみてくれました。また、お店を気に入ってくださり通ってくれた地域の方々。あらためて支えられていたことに気づき、感謝の気持ちで一杯です。
そんな浪江の思い出と言えば、野馬追に参加したこと、町民体育祭に地域の皆さんと参加し楽しく汗を流したこと、幼稚園や小学校で知り合った親御さんたちのおかげで友人が増えたことなど。充実した日々でした。

時子は、地元スーパーに勤務。今の暮らしを支え、息子の在世の教育資金を準備するためにも、お互いにしっかりと働かなければなりません。これから息子が挑戦する、選んでいく道をしっかりと親としてサポートしていきたいと思っています。

浪江のこころ通信

・第25号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第25号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北口ミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4218



興化市青少年友好訪問団





渡部 清美さん・多津子さん(井手)

取材者：浪江町千葉県駐在 大内、井戸川
取材日：6月11日

とうろう流しに 「浪江に早く帰れるように」と願いを込め

福島県の避難所から郡山へ、東京での生活を経て、千葉県松戸市で暮らす渡部さんご夫婦。帰れないと言われても帰りたい、いつ帰ることができるのか分からない事がつらいと話されました。



■清美さん
地震が起こったその時、家内とテレビドラマ見ていました。見ると家内は買ったばかりのテレビにつかまっていた。何度もの余震に怖くなり、その日は納屋で過ごしました。翌日、避難命令にしたがい、津島の体育館に避難、二本松の岳下公民館を経て、郡山の親戚の家で2泊した後、東京の練馬にいた娘の家で3カ月世話になりました。病松戸に来たのは一昨年12月、病

院が近い現在の住まいは、松戸に来て2カ所目の家です。私には持病があり、避難先を転々としながら週3回の通院は大変でした。浪江にいた時は車で何処へも行っていました。慣れない土地での運転は怖いので今はしていません。歩いて行く距離に親戚な医療施設があり助かっています。ここからバスで10分くらいの所に「黄色いハンカチ」という避難している人たちが集まるサロンがあります。そのスタッフの方が誘ってくれた「とうろう流し」では、灯籠に「早く浪江に帰れるように」と祈りを込め流しました。離れてみると浪江の良いところばかり思い出されます。井戸の水、採れたての野菜、米、新鮮な魚、みんなで飲み交わす酒、本当に豊かだったと思います。バラバラになった知り合いや友達とは、もっぱら携帯で話しています。でも声だけ。会って話したいです。震災直後、余震の影響での避難と思いい、2、3日で戻れる体

制で出てきましたが、とんでもない事でした。「これからどうするんだ」と言われても、決断できない、答えられない。「帰れない」と言われても帰りたい思いでいっぱいです。子どもの頃東京から田舎に疎開した事がありました。またこの年になって「疎開生活」です。関東にいる兄弟が、時々訪ねてくれるのが慰めになっています。

■多津子さん
一時帰宅をした時、時計だけが動いていたのが思い出されます。朝起きると、ここに寝ていたんだと悲しくなります。もう帰れないのではと思うけれど、2人で頑張っただけで暮らして、いつか帰らないうちにも思っています。浪江のみんなに、会いたいです。今、ペランダで野菜や花を育てています。きゅうり、なす、ごうや、なんばん、トマト。どんな実がなるのか楽しみです。



横山 浩志さん(請戸)

取材者：特定非営利活動法人 市民公益活動パートナーズ 阿部
取材日：6月9日

今は無理でも、娘や息子が大人になったら夫婦2人で生まれ育った浪江に戻りたい

震災前は、苧野小学校で教諭をしていました。現在は二本松にある浪江小学校に転勤になり、家族と住む郡山から通っています。



▲横山浩志さんご家族
左から 恵美子さん、和佳奈さん、知明くん

■離れ離れだった家族の安否
私は苧野小学校で勤務中に震災に遭い、妻は浪江町の会社、娘は請戸小学校、息子は保育園、両親は自宅とみんな、ばらばらでしたが、苧野小学校が避難所になっていたためその対応に追われ、家族となかなか連絡がとれませんでした。妻は勤務中でした。会社は倒壊しましたが、幸いにも机の下に避難して九死に一生を得ました。また妻が偶然知り合いに遭

い、息子を保育園に迎えに行くことができ避難所の苧野小学校まで乗せてもらうことが出来ました。しかし、その時点ではまだ娘と両親の安否を確認することが出来ませんでした。一度、自宅に戻ろうとしましたが、道路状況があまりにも悪く先へ進むことも出来ず断念しました。その夜、請戸小学校の教頭先生から連絡を頂き、娘の無事に安堵しました。翌朝6時に娘を迎えに行きました。その時、防災無線を聞き、先ず妻の車を取りに行き、津島へ急ぎました。余震も激しく、道路は避難する車で渋滞してしまいました。その後、葛尾村へと移動した夕方に1回目の原発の爆発を知りました。その夜には全村避難となり妻の実家のある郡山へ身を寄せ、15日の2回目の爆発の後には姉を頼って東京へと避難しました。両親の安否を確認出来ないまま避難しなければならぬことと、娘と息子の安全を確保しなければならぬ思いとの間で葛藤があり、遣り切れない思いでした。インターネットや県警に問い合わせをしながら両親を探

し続けましたが、茶毘に付された遺骨との対面になりました。暫くは、両親への後ろめたさや、どうすることも出来なかつたとの気持ちの狭間で、眠れない夜も随分ありました。

■いつか帰れる日を願って
震災後すぐ4月には、私の仕事と娘の中学校への入学のため東京から郡山に戻ってきました。大分、気持ちも落ち着きました。請戸の自宅へは2度戻りましたが、津波で地区全体が何もかも流され、自分がどこに立っているのかさえもわかりませんでした。現在は、浪江小5年生5名の担任教師として生徒たちの心のケアをしながら、みんなで一緒に前向きに頑張っています。また、娘も参加している浪江町請戸地区の郷土芸能の「田植え踊り」を復活させ、県内の仮設住宅などで踊りを披露しています。請戸を感じられる唯一の行事です。避難生活を送っている皆さんにも大変喜んでもらっています。今はこのことを励みに、一日も早い原発事故の収束といつか戻れる日を願いつつ、日々を送っています。



堀井 君子さん(大堀)

取材者：一般社団法人 葛力創造舎 下枝
取材日：5月31日

みんなで支え合える場をつくりたい

浪江町大堀から郡山市に避難中の堀井さんは、まわりに友人もでき、みんなで話せる交流の場ができ始めているといいます。「こもりがちな避難中のみんなが集まれる場があれば、いろんな話を、聞いたり話したりできるし健康にもいいんだよ」と堀井さんはおっしゃっています。

■新しいお知り合いはできましたか？
郡山市住民の方や避難所で知り合った方で友達ができ交流もでき始めました。中には家に遊

■現在の生活はいかがですか？
先行きが決まらないことや浪江と郡山の暮らしの違いに落ち着かない気持ちでいつもいます。人一倍健康だと思っていました。が、避難後、体に不調がでるようになりまし。郡山の接骨院にいくようになりまし。スナップの方の元気いっばいの挨拶や、先生と話すことでホッとすることができました。それからだんだんと体の調子もよくなり始めました。

■震災の時の様子は？
震災のときは自宅にいました。いつもは遊びにきているはずの中学生の孫がいなかったので必死に探しました。家の中や周りで名前を呼んで探しましたが見つかりませんでした。玄関を確認したら靴がなかった。娘に確認したら靴がなかった。娘に確認したところ、娘の家にいることがわかりほっとしました。



■いま感じていることを教えてください
いろいろ話を聞きますが、仮設住宅や借り上げ住宅で籠もりがちになると、なかなか外に出づらくなります。周りの目が気

になつて気後れしてしまう。どんな話でも人と話すことで、気持ちも晴れるし、健康にもいい。家にこもりがちの人が、もっと外に出られるようになったらと思います。借り上げではなかなか隣近所と仲良くなれないが、私は近所とのつながりができればどこかにいけばお土産を買ってきてくれたり、雪はきをしてくれたり隣近所の付き合いができてきた。頼まれて、近所の留守中のお宅の手入れもしたりしています。これからは浪江の人同士や、郡山のひと、みんなをつなぐ役割になればと思



半谷トミ子さん(藤橋)

取材者：茨城NPOセンター・コモンズ 天井
取材日：6月8日

教えを実践しながら、毎日を過ごす

群馬県に避難後、娘の呼び掛けでつくば市の公務員宿舎に過ごしています。今は、近くにいる娘さんとやりとりしながら毎日を律しながら過ごしています。

浪江町で生まれ、小さい頃はいわき市の平駅近くにあった大きな洋食の食堂をやっている家にいました。いわき市で進学生高生校の頃は一時、横浜へ学徒動員に行っていました。いわき市に戻ってからは食堂を閉め、浪江町に生活に移し、震災まで過ごしました。食糧事務所をしていた旦那と結婚し、息子と娘2人を授かりました。旦那は早くに亡くなったけれども、周り



▲部屋に飾ってある手づくりの小物や家族の写真と

の方には本当にお世話になりました。所属していた会では会計を務め、今でも会の方々とやりとりすることもあるわね。
娘は双葉町と大熊町に嫁いで、嫁いだ先から浪江町によく孫と一緒に帰ってきてくれていました。来た時には大勢の食事やおにぎりを準備して泊めていたの。そんなこともあってか、避難先の群馬のホテルでは孫には随分助けてもらったわ。ホテルでの生活は朝礼や敷地内や部屋の男女で分担しての掃除など規則正しい生活でした。
10月、つくばで住むところが見つかったと娘から連絡があり、つくば市の方に越してきました。しばらくは近くに娘2人の家族が住んでいましたが、娘の1人はいわき市の方に行くことになりました。

息子もつくばで同じ部屋に生活していましたが、たばこやお酒が多かったこともあったけれど、知り合いがいなかったり、道が分からなかったり、生活の変化もあったんだろうね。一昨年に亡くなりました。元々精神的な障害があつてね。それを考

えると将来、私の体が弱くなつた時の苦勞かけずに済んだし、1人で残しておくことも心配だったから「あんた親孝行してくれだね」って思ったわ。
今はね、やっぱり身近に気楽に話をする仲の良い友人がいなのが寂しいわね。買物近所のスーパーに行ったり、近所の卵屋さんと「あら、今日はあなたが担当なのね。これ持ってきたから食べて」ってちょっとした惣菜を持って話に行くことはあるわ。それでお互いに「半谷さんお茶飲んできな」ってやりとりもあるのよ。
今の楽しみは毎月届く会の会報が楽しみ。毎朝お経を読み、部屋をきれいにしてしんとするようになっているの。こつちに来るから始めたひょうたんの作り物や小物を飾ったりするのが好きでね。時々書道で好きな言葉を書いたりもしています。健康に気をつけて、子どもに迷惑かけずに過ごしていきたいと思わ。



坂本秀一郎さん・由里江さん(請戸)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：6月16日

毎日を過ごすことに精一杯だった2年間 —浪江を思いつつも、この土地の 人間になろうとしてきたことに気づく—

『浪江のこころ通信』第1号に掲載された坂本さんご家族は、現在も群馬県高崎市に暮らしています。この2年間は、秀一郎さんが単身赴任となり、長女や由里江さんの体調の変化、市内での転居などいくつかの困難がありました。他方で、ご近所や地域の方々との触れ合いを通して、この土地の人になろうとしてきた2年間だったそうです。

今年の2月に借上げの集合住宅から、一戸建ての現在の住まいに移りました。お隣を気にしながらのアパート暮らしは慣れませんでした。今は少し落ち着きました。ただ、引越と同時に、長女の莉菜が精神的に苦しくなりました。スクールカウンセラーの先生からは、震災以降、ずっと我慢していたことが出てしまったとの指摘を受けました。今は元気にになりましたが、震災をめぐる精神的な問題はまだまだ続いているのです。

私は震災後、高崎市内の会社に半年ほど勤め、その後は浪江町の仕事仲間と声を掛けられて宇都宮の会社に単身赴任しています。被災地での建築の仕事なので、岩手など遠い所での仕事の時は、月に1、2回しか自宅に帰ることができません。妻も子どもも体調を崩したこともあり、不安な状況が続いています。妻は、高崎市内での被災者支援の活動に参加していました。福島からの避難者の集まりを支援する側として、できる限りのことをしていました。ただ、その場に参加してホッとする気持ち



▲左から 剛さん、秀一郎さん、華菜ちゃん、由里江さん、莉菜ちゃん

と同時に、これから先のことを思うと地元高崎の方々や交流することも大切なのではないかと戸惑いもあつたようです。この先、自分たちがここで生きていくのであれば、地元の地域にかかわっていくべきではないかと。父は、ご近所や地域にたくさん知り合いができています。ほぼ毎朝、近くの公園に集まっておしゃべりをしたり、お茶飲みやグランドゴルフに出掛けたり、最近では公民館での料理教室や山登りなどにも誘われて本当に地域に溶け込んでいます。時間の経過とともに、この土地の人になろうとつづけるのだと思います。

この2年間は、毎日の生活を進めていくことで精一杯でした。これから先のことも妻とは時々話しますが、結論は出るものではなく、とにかく子どもの健康と安全を第一に考えています。近いうち



熊田 伸一さん(請戸)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：6月12日

「来る者拒まず」の心意気で、 自治会の仕事をしています

笹谷東部仮設住宅(福島市)の自治会長と、今年4月に設立された福島市相双自治会連合会の会長も兼務される熊田さん。穏やかな表情の陰には、故郷への思いや福島市への避難のことなど、怒りや悔しさもあるのでしょうか、本当に静かにあの日のことなどをお話してくださいました。



▲いつも「秘書」のようにおじいちゃんに付き添う優希君と。避難のため転校をし、今は3校目の福島市岡部・岡山小学校に通っています。

■時折、離れ離れになりながらも、福島市では家族一緒です。大地震が発生した時は、高瀬にある会社で仕事をしていました。慌てて請戸の自宅に戻ると、家族は既に避難するところでしたので、私は再び会社に戻り、そのまま泊まりました。妻と娘2人、孫の家族4人は浪江町役場の隣の町民体育館に、母は姉夫婦宅にと、家族はばらばらに避難しました。

翌日、原発事故による避難命令が出て、妻の母も連れて津島の浪江高校分校に行き、やっと家族と合流出来ました。その後、14日の午後には川俣町の双葉町の臨時役場の建物に避難し、18日には山形県へ移動して4月半ばまで山形市スポーツセンターにおりました。県外に避難したことで情報が極端に少なく、妻がひと足先に福島に戻り、二本松市東和の塩沢で1週間ほど避難生活をしながら二次避難の情報を集め、連絡を取り合いながら、ようやく猪苗代観光ホテルに移ることが出来ました。翌日には姉と一緒に母も入居しましたが、避難先だった東和コミュニティセンターで体調を崩して歩行が困難になり、4月19日に太田熱海病院に入院しました。

6月6日に妻と孫家族がこの笹谷東部仮設住宅に先に入居し、私は母の退院を待つ14日に家族と合流しました。現在、母は市内にある老人保健施設におりますが、カートを押して歩けるようになりました。また、昨年

10月に娘が結婚して千葉に嫁いだことは、家族にとって明るい出来事でした。

■ここで、皆さんのお世話をします。津波で流された自宅を見に行つたのは、だいぶ時間が経った、夏頃でした。例え浪江町のインフラが復旧しても、家は有りません。原発に対する不安も大きいです。震災前、庭には畑があり、母が野菜を作っていました。田んぼはお貸して米も作っていました。その全てが無いですから、帰らないことを家族みんなで決めました。

会社は二本松で営業を再開しましたが、私は避難中に定年を迎えました。今の楽しみは晩酌です。時折、気の合う仲間と酌み交わすこともあります。現在、笹谷東部の自治会長を務めておりますが、請戸では隣組をお手伝いした経験もありますし、浪江町の各地区から来られた方々と一緒にさまざまな活動に取り組んでいますよ。